



矢島 渚男 選

鶴折るは折りか悔いか夜半の秋

吹田市 堀田恵美子

【評】眠れずに起きて鶴を折る。ああ、これは未来への希望か、悔恨だろうかと考えてみる。淋しく虚しい間だ。

声援も一周するや運動会

富山県 米山カローリング

【評】集落対抗か、クラス対抗か。

種目はリレーか。関係ある選手が応援席にさしかかると音量が上がる。選手たちはばかりか、声援も一周するというのが面白い捉え方だ。

ひっそりと終の花留守の家

仙台市 内海 恵子

【評】静かにヒイラギの花の香りがひっそりと溜まっている。季節がしつかりしている。

突然の有刺鉄線大花野

向日市 福岡 猛

留守の家多かり国勢調査暮の秋

一関市 高橋紗千子

擁ゆるむ味噌桶晒す秋日かな

小諸市 大池 信子

百キロの完歩待つ身や十三夜

北九州市 小住 貞子

素粒子となり漂ふや天の川

名古屋 山内 三雅

伝えたき言葉と人を失くし秋

東京都 関根ともみ

清貧に生く心安吾亦紅

越谷市 小林ゆきお

高野ムツオ 選

虫の音や見えない星が見える空

東京都 飯田 隆起

【評】曇って見えないののではない。満天の星に違いない。しかし、虫の音に耳を傾けていると光が弱く肉眼で捉えられない無数の星も次第に見えてくる思いになったのだ。

むしやむしやと音まで聞こえいぼむし

南房総市 山根 徳一

【評】蟻は共食いするから雌が交

尾後の雄を食べているのかもしれない。聞こえないはずの恐ろしいまでの生命力の音を心の耳が捉えた。よつこそと墓地一面に曼珠沙華

神戸市 吉野 勝子

【評】曼珠沙華が墓地に多いのは球根の毒でモグラやネズミから遺骸を守るためだそう。今年も精一杯咲いて墓参の人々を歓迎する。

秋燕一羽見かけてそれつきり

三原市 天崎 千寿

十あらば獅子唐十のかたちあり

川崎市 井手真知子

何でもなれる子供等雲の峰

三谷市 星野 愛

秋気澄む数多の塵の見えずして

神奈川県 露木 美子

一言主守る葛城木守柿

吹田市 前田 尚夫

なほ続く防潮堤や秋の風

相模原市 はやし 央

県道の左稲架掛け右マシジョン

川崎市 加藤 英行

正木ゆう子 選

きんなんや薩摩に茶碗蒸の唄

浜松市 久野 茂樹

【評】そんな愉快な歌があるのだ。茶碗蒸を知らない人が、「茶碗に付いた虫」と勘違いする歌で、鹿児島弁満載。元は、小学校の学芸会で、劇中歌として作られたらしい。

ことごと味透き通るおでん鍋

唐津市 室井加代子

【評】すっきりした味ということだ

ろが、濁りの無い汁や、大根に火の通った透明な見た目が想像される。時間をかけ、煮立たせないよう。甘納豆ほか買いためし秋の暮

水戸市 大野太加し

【評】密封の羊羹ほどではないにしても、甘納豆は常温で日持する優れたお菓子だ。小豆、金時豆、白隠元。伝統的な季語に負けない甘納豆。窓開けて鍋の気分削ぎにけり

川崎市 沼田 広美

障子貼りをへれば母の在るこし

大分市 加藤 元二

夜長し葉の箱の整理など

秋田市 植木 智子

すぐ前の川から霧の立つ湯宿

大阪市 今井 文雄

蟬鳴くや家電寿命の連鎖来て

東大阪市 梶田 高晴

ブラネタリウム生家の常の夜半の秋

青梅市 松野 英昌

通話中互ひに入る虫の声

入間市 豊泉 繁雄

小澤 實 選

夫剥けば梨のサイズはしがS

白井市 毘舎利愛子

【評】夫が梨を剥くと、皮を厚く剥いてしまふ。LサイズがMサイズでなくて、Sサイズになってしまうのが、すごい。せつかく剥いてくれるので、断るのも悪い、悩むところ。すず虫の夜は白ワイン異論なし

栃木県 あらあひとし

【評】すず虫が鳴いている静かな夜

に飲む酒は、たしかに白ワインがいのような気がしてくる。理屈ではない。ぼくもそれには、異論はない。左に跳び右に巡回蟻飛ぶ

川越市 大野宥之介

【評】くさむらを発ったばったの動きをいねいに描写した。ばったへの愛情。そして、ばったの飛翔に空気が澄んでいることも感じられる。銀河へとボールジャンパー飛翔せり

川越市 益子さとし

レコードのボール・モーリア秋深し

上越市 小島 章子

天高しパスで受け取る缶コーヒ

柏市 小畑 昌司

蛙遡る騒立つ川となりけり

町田市 谷川 治

赤とんぼボバリングにて並びけり

池田市 後藤 和豊

立つたまま休む歩荷や草紅葉

福島市 引地こうじ

畑のものの食ひ散らかして熊の糞

東京都 吉田かずや

触りたい

堀本裕樹 (俳人)

俳句あれこれ

朝、娘と手を繋いで登園する時、その道すがら必ず生き物に出合う。森の面影を充分残した公園を抜けてゆくの、自然の気配が濃い。一番驚いたのは、沢蟹との出会いだった。小道を歩いていると、突然沢蟹が現れたのだ。この公園のどこかに、まだ清い流れがあるのだろう。「触ってみ、掌に沢蟹を載せて娘に言った。怖がったが、大丈夫だからと僕が促すと、指先で突いた。ね、可愛いでしょ？」「我慢できる？」「できるよ、沢蟹触っちゃったね」そう言う、娘は嬉しそうに笑った。先日は葉っぱの上で揚羽蝶がじっとしていた。二人で近寄っても飛び立たない。秋の蝶だから元気がないのか。通り過ぎた後「触りたい」と娘が言い出したので引き返した。「やさしくね、領いた娘は、指先でつんと触れる。やはり揚羽蝶は飛ばず、何かに耐えるように翅を小刻みに震わせた。△秋蝶に寄り目して子の指触る。裕樹



題字デザイン・イラスト 福田美蘭